限定詞と関係詞節*

吉田正治

0. はじめに

変形文法のわく組みで関係詞節とその先行詞における限定詞との関係をはじめて包括的に分析したのが Smith (1964) であった。彼女は(1)に示したような資料を基に，限定詞と関係詞の用法との共起制限に着目して，限定詞を any や all のように制限用法しか許容しない，'unspecified'，冠詞のように制限・非制限いずれの用法をも伴い得る，'specified'，固有名詞のように非制限用法のみと共起する 'unique' の3種類に下位分類している。

(1) a) John, who knows the way, has offered to guide us.
b) * John who is from the South hates cold weather.
c) They pointed to a dog, who was looking at him hopefully.
d) They pointed to a dog who was looking at him hopefully.
e) *Any book, which is about linguistics, is interesting.
f) The book, which is about linguistics, is interesting.
g) Any book which is about linguistics is interesting.
h) He lives in a skyscraper that is twenty stories high.
i) The man who fixed the radio left this note.

その後，関係詞節の派生をめぐって Ross (1967), 梶田 (1968), Chiba (1972), Schachter (1972), Chomsky (1973), Andrews (1975) など Smith の分析に対する修正案がつぎつぎに提案される一方，他方では，関係詞節の制限・非制限用法上の意味的・機能的相違に関する論考（原

田 (1971), Thompson (1971), Loetscher (1972), Ziv & Cole (1974), Hawkins (1978) など) が現われたけれども，関係詞節と先行詞の限定詞との相互関係については，彼女の観察が現在でもほぼそのままの形で受け入れられている。しかし彼女の研究は制限用法の関係詞節と非制限用法の関係詞節はその現われる環境が異なるという点に関連して限定詞と関係詞節の関係を記述しているだけであって，限定詞の性質が関係詞節の用法の決定とどのような係わりを持つかについては全く触れていない。その上，固有名詞と関係詞節との関連については彼女の分析の反例となると思われる現象も見られる。そこでこの小論では，限定詞のうち冠詞と zero form を伴う固有名詞と関係詞節との相互関係を意味的側面も含めて明らかにしたいと思う[1)]。

1. 冠詞と関係詞節

冠詞と関係詞節の関係を論ずる前に，定冠詞と不定冠詞の用法と意味を概観し，制限用法と非制限用法の形態的・機能的相違を述べておくのが得策であろう。

1.1. 定冠詞の用法と意味

定冠詞 the は，所有格の人称代名詞や deictic な this, that とともに，典型的に定表現を形成する。定表現とは総称表現を除けばそれによって表される指示物が話し手と聞き手の間で了解されている，あるいは，少なくとも容易に聞き手に了解され得る表現のことである。この了解は，(2a)のように談話の中にすでに導入ずみであるために可能になる場合，(2b)のように発話が生じる文脈によって決められる場合，(2c)のように話し手と聞き手が共有する知識ゆえに可能な場合，また (2d) のように，聞き手がたとえその指示物について予備知識が全くなくとも，その気がありさえすれば容易に了解できる場合がある。

(2) a) Yesterday I caught a fish. *The fish* was big.
b) Will you open *the door*, please?
c) *The President* is going to speak on TV tonight.
d) I'm coming to Copenhagen tomorrow; I suggest we meet at *the Little Mermaid* at six o'clock[2)].

この話し手と聞き手との間の指示物に対する了解は，何もわれわれの知っている現実の世界においてのみ成立するのではなく，想像上の架空の世界においても言語的にその指示物が認知され得るかぎり成立する。たとえば，

（3） Last night I dreamed that there was a little unicorn in the garden. *The animal* was dancing ....

において，想像上の動物である unicorn も言語が構築した夢の世界においては存在し得，従って，(2a) の a fish と同様に，2度目に言及されたときには聞き手にもその指示物に対する了解が成立するゆえに定表現になったのである。同様なことが，発話時に存在しない指示物についても観察できる。たとえば，

（4） Bill is going to write a book again. *The book* will be interesting and be read by many people.

においては発話時には問題の本は完成されておらず，従って存在しないはずにもかかわらず，話し手と聞き手の間には完成したときの本を指示物とみなす了解が成立するゆえに定表現になるのである[3]。

上述の観点に沿って固有名詞の意味を考えれば，固有名詞は定義上 'unique reference'[4] を持つのであるからあらゆる定表現の中で最も定的な性質を持つ表現と言える。

1.2. 不定冠詞の用法と意味

不定冠詞 a (n) は，any や some などと同様に不定表現を形成するものと一般的に考えられている[5] と思われる。しかし，定冠詞による定表現が総称表現を除けば語用論的には一義的に定義できるのに対し，不定冠詞による（不定）表現は（総称表現を除いて）語用論的にもかなり異質なものを含み，少なくとも次の3の用法を認めねばなるまい。以下，Burton-Roberts (1976) を参考にして概観する。

（5） a) 特定的 (specific)
b) 非特定的 (non-specific)
c) （主語の）属性を表す (attributive)

（5）の各用法を表したのが，（6），（7），（8）の例文である。

（6） a) *A whale* struck the ship.
b) The whale struck *a ship*.

(7) a) Since Bill lives very for from town, he needs *a car.*
b) John wants to marry *a Japanese girl.*
(8) a) Mary is *a musician.*
b) John is *an American.*

ある表現が特定的とはその表現によって表される指示物が聞き手には了解されていなくとも話し手には了解されていることである。話し手による指示物の了解は定表現の場合と同様に，必ずしも具体的な現実の世界にのみ成立する必要はなく，言語世界においてその了解が成立しさえすればよい。従って，ある表現が特定的であるためにはその表現が生ずる言語世界においてそれが表す指示物の存在が話し手に確認されていればよい，ということになる。このことは，たとえば，(6a) に対して，

(9) a) There was a whale such that it struck the ship.
b) *A certain* whale struck the ship.

などの言い換えが存在し，さらに，同一談話においては，(10)に見るように定表現によって受けることが可能であることによって明らかである。

(10) A whale struck the ship and *it / the whale* died.

これに対して，非特定的表現とはそれによって表される指示物が関係する言語世界において具体的な対応物を持たない表現のことである。簡単に言えば，その指示物はそれが属する類の任意のメンバーでよい。従って，(7a) の文脈では，(9a) に対応する言い換えもなければ，自由に定表現で受けることも不可能である。

(11) a) * There is a car such that Bill needs it.
b) * Since Bill lives very far from town, he needs a car. It is black.

ついでながら，(7b) については一言補足説明が必要であろう。(7b) のような modality を表す文脈に生じた不定表現は，通例，特定的解釈と非特定的解釈の二通りの解釈が可能である。特定的な読みでは，John が結婚したがっている（たとえば，久美子という）特定の日本人の女性が存在していると解釈される[6]のに対し，非特定的な読みでは，John が結婚の対象として考えているのは（たとえば，アメリカ人の女性でもソ連の女性でもなく）日本人の女性であって，具体的な女性は存在していないと解釈される。従って，特定的な読みでは，(6) と同様に (9a, b)に対応する言い換えが可能であるが，非特定的な読みではそうした言い換えが

不可能であるだけでなく，(7a) に対する (11b) と同様に定表現で受けることも不可能である。

(主語の) 属性を表す表現はそれによって表される指示物が発話の生ずる言語世界において具体的な対応物を持たないという点では非特定的表現と同じであるが，典型的に主格補語の位置を占めもっぱら主語の表す entity についての属性を記述する機能を持つ。つまり，この表現は機能的には(12)にあるような形容詞(句)と同じであって[7]，具体的な'object'を指すのではなく，'concept' を表す[8] と言える。

(12) a) Mary is very intelligent.
b) John is American.

この事実は，たとえば，(8a)の主語と補語である不定名詞句の位置を交換できないのは (12a) において主語と形容詞句の位置を交換できないのと全く同じ理由からであり，かつ，問題の句を先行詞にして非制限用法の関係詞節を作ると，ともに which が使用されることからも確認できよう。

(13) a) * A musician is Mary.
b) * Very intelligent is Mary.

(14) a) Mary is a musician, *which* (* who) her sister is not.
b) Mary is very intelligent, *which* her sister is not.

1.3. 関係詞節の制限用法と非制限用法

関係詞節の制限用法と非制限用法の違いを明らかにするために，次の一対の文を考えてほしい[9]。

(15) a) Children who learn eăsily | should start school as early as possible.
b) Chĭldren, | who learn eăsily, | should start school as early as possible.

(15a) が制限用法で，(15b) が非制限用法である。形態的に言えば，書かれた場合関係詞節が comma によって区切られるのが非制限用法で，区切られないのが制限用法である。発音される場合は，問題の関係詞節の前後に pause が置かれ，その節が1つの tone unit を形成するなら非制限用法で，関係詞節の終わりで rising intonation になり，先行詞と関係詞節の間に pause が認められないなら制限用法である。また，し

ばしば指摘されるように，関係詞節が先行詞から離れて文末に外置され得るなら制限用法で，それが許されないなら，非制限用法である[10]。

(16) a) A boy that I had never seen before was kissing Mary.
b) A boy was kissing Mary that I had never seen before.
c) A boy, whom I had never seen before, was kissing Mary.
d) * A boy_i was kissing Mary, $whom_i$ I had never seen.
e) * John was here, whom I had never seen before.

関係詞節の両用法上の相違を意味的観点から述べれば，関係詞節が先行詞の表す指示物の範囲を限定する機能を荷っているのなら制限用法，そうでなければ非制限用法である。これを（15a, b）に即して説明することにしよう。(15a) では，who learn easily という関係詞節は，Children の中から easy learners と呼び得る子供達を選び出す役割，つまり，先行詞の Children の指示物の範囲を「物覚えのよい子供達」に限定する役を果している。これに対し，(15b) では，関係詞節にそうした限定機能は認められず，関係詞節は先行詞の指示物に対して話し手の comment ないしは補足説明を表している。従って，文の表す主張 (assertion) から言えば，制限用法の関係詞節は主節の主張の重要な一部を形成するのに対し，非制限用法のそれは主節の主張とほとんど係りを持たず，いわば，background information を成すにすぎないと言える[11]。つまり，(15b) は文の表す主張からだけ言えば，関係詞節を省略した文と何ら本質的な違いがないと言えるわけである[12]。

以上，冠詞の用法と意味，関係詞節の制限用法・非制限用法について概観したのでいよいよ本題に入ることにする。

1.4. 定冠詞と関係詞節

本節では1.1.で述べた意味で先行詞が定表現であるなら関係詞節は義務的に非制限用法になることを論証する。

Smith (1964) によれば，すでに0.で見たように，定冠詞は制限・非制限の両用法を選択できることになっている。確かに（1f）が非制限用法を従え，(1i) が制限用法を従えている。そして，事実，(1i) と同じ構造を持つ文はそれこそ無限にあると言ってよい。手元にある文法書からほんの数例をあげてみよう。

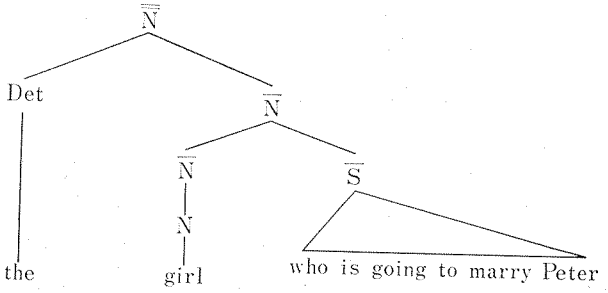
(17)[13]a) *The girl* who is going to marry Peter is an extremely attractive brunette.

b) *The car* which was following us seems to have disappeared.

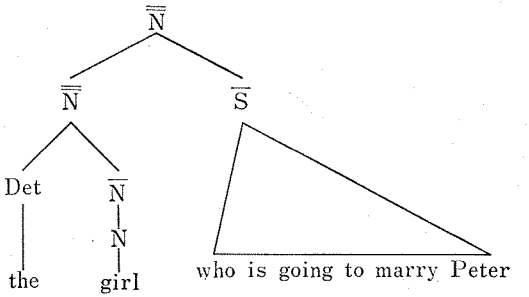
c) *The man* that the policeman caught received ten years in jail.

ここで問題になるのは，(17) の各文の先行詞が 1.1. で述べた意味で定表現なのかどうかである。そこで思い出してほしいのは，1.3. で関係詞の制限用法の本質的な機能が先行詞によって表されている指示物の範囲を限定することにある，と指摘したことである。もしこの指摘が正しいとすれば，そして，もし (17) の各文の先行詞が真に定表現であるなら，定表現である先行詞が制限用法の関係詞節によって修飾されること自体論理的矛盾と言わねばならない。なぜなら，定表現とは定義上それによって表されている指示物が話し手と聞き手の間に了解されている表現であるから，ここで新たに関係詞によって先行詞の指示物の範囲を限定してもらう必要がないからである。比喩的に言うなら，談話の中ですでに身元の割れている人物がいて，話し手も聞き手もその人物の身元を十分に確認している場合，よそからその人物についてわざわざ身元保証をしてもらう必要がないのと同じである。とすれば，(17) および (1i) の定表現は単に先行詞だけを指すのではなく，実は，先行詞＋関係詞節全体を指すものと考えねばならない。つまり，たとえば (17a) で言えば，Peter と結婚することになっている女性がいて，話し手も聞き手もその女性が誰であるかを承知しているわけである。従って，the girl who is going to marry Peter の構造は (18a)[14] ではなく，(18b) である。

(18) a)



b)



(17) に見られるような関係詞節は，一般に，[$_{\bar{N}}$ [$_{Det}$ the] [$_{\bar{N}}$ N $\bar{S}$]] という構造を持つものと解釈すべきであることを示す格好の談話がある。次にあげるのは Hemingway の有名な小品 'Indian Camp' の冒頭の部分である。

(19) At the lake shore there was another rowboat drawn up. The two Indians stood waiting.

Nick and his father got in the stern of the boat and the Indians shoved it off and one of them got in to row. Uncle George sat in the stern of the camp rowboat. The young Indian shoved the camp boat off and got in to row Uncle George.

The two boats started off in the dark. Nick heard the oarlocks of the other boat quite a way ahead of them in the mist. The Indians rowed with quick choppy strokes. Nick lay back with his father's arm around him. It was cold on the water. The Indian who was rowing them was working very hard, but the other boat moved farther ahead in the mist all the time. (下線は筆者が施したもの)

冒頭に紹介される2人の Indians はそれぞれ主人公の Nick と父親，Uncle George のボートの船頭をつとめる。Uncle George の乗ったボートをこいでいる Indian は若者であるとの記述はあるが，Nick と父親の乗ったボートをこいでいる Indian については，下線部に至るまで彼を識別するための記述は何もない。そこで，もう1人の若い方の Indian と区別するために who was rowing them との修飾節をつけたのであ

る。ということは，この関係詞節は the young Indian の young と同じ働きをしていることを示すものであって，もし the young Indian が $[_{\bar{N}}\ [_{Det}$ the$]\ [_{\bar{N}}\ [_{\bar{N}}[_{Adj}$ young$]\ [_{N}$ Indian$]]]$ という構造を持つなら，問題の関係詞節も (17b) と同様な構造を持つと言えるはずである。

さらに上の議論の正しさを示すと思われる統語的証拠がある。 make headway, keep track of, pay homage to, pay lip service to, take umbrage at, ... などの idiom の目的語には，ふつうの NP とは異なり，極めて厳しい制限がある。たとえば，通例冠詞も伴わなければ，複数にもならない。修飾語を伴うとすれば，少数の評価を表す形容詞やその語の性質と本質的に結びついた形容詞を伴うだけである[15]。だからこそしばしば，上のような idiom を frozen expression と呼ぶのである。そこで，次の一連の文を見てほしい。

(20)[15] a) We made satisfactory headway.

b) * (The) headway was satisfactory.

c) The headway that we made was satisfactory.

d) * The headway, which was made (yesterday), was satisfactory.

(20b, d) が非文法的であるということは，headway のような複合動詞句の一部を形成する名詞は単独では定表現になり得ず，(20c) の示すように関係詞節を伴ってはじめて定表現になり得ることを示している。

上の主張は，しかしながら，これまでの定表現の説明と矛盾するのではないかと反論する向きもあろう。つまり，(20c) の the headway that we made の表す指示物がこの文が発せられる前に話し手と聞き手の間に了解されているわけではないとの指摘である。しかし，(20c) のように関係詞を伴ってはじめて定表現になるのは定表現になる1つの典型で 1.1. で述べた (2d) に対応する例と考えられる。(2d) の the Little Mermaid はこの文が発せられたとき，たとえ聞き手にその指示物に関して確固とした予備知識がなくとも聞き手にその発話を理解する気さえあればそれが Copenhagen の然るべき場所であるとの予解が成立するからである。あるいは，(21) の各文の定表現と同じであると考えてもよい。

(21) a) *The moon* moves round *the sun.*

b) Shakespeare is *the greatest poet England has produced.*

c) John is *the only man that I can trust.*

つまり，(21) の各文の定表現はそれらが発せられた文脈では 'unique' であるがゆえに定表現になったのである。この現象は (22) の文にも観察できる。

(22) a) *The writer that I like* is Thomas Hardy.
b) *The approach that he took to solve the problem* was quite unique.

(22a) はほぼ (23) と同意義である。

(23) The writer that I like best (in the list / in the world) is Thomas Hardy.

つまり，「最も好きな作家」とは一人しかいないからこそ定表現なのである[16]。(22b) は，彼がその問題解決のために取った方法が唯一無二であるゆえに定表現になったのである。言い換えれば，関係詞節によって先行詞の示す指示物が 'unique' になったわけである。

以上，定冠詞を伴う先行詞が制限用法の関係詞節を従えるときは[the [N $\bar{S}$]] と分析されるべきことを述べた。次に述べるべきは，定冠詞を伴った先行詞が 1.1. で述べた意味で定表現であるなら，(1f) のように関係詞節は非制限用法になるということである。がしかし，このことは定表現の意味を考慮に入れればこれまでの議論で自明のことであると思われるので，ここでは限定詞の中でも最も定冠詞に近く，deictic に使われるゆえ一層定表現を作る this や that は原則として非制限用法の関係詞節を従えること[17]，および，非制限用法の関係詞節は主文の表す命題内容よりも話し手の主張と深く係わっていることを示す統語的証拠をあげるにとどめたい。

(24) a) This table, which, as far as I know, was made in 16-th century England, is said to be priceless, and that chair, which, interestingly enough, was found in an ordinary farmhouse in England, is believed to be a Chipendale.
b) This car, which only rarely did I drive, is in excellent condition[18].

(24a) の文脈では，this と that が 'deictic' に用いられている。つまり，話し手が table と chair をそれぞれ指さしながら説明していることは明らかである。それゆえ，非制限用法の関係詞節を従えているのであ

る。さらに，この関係詞節中にいわゆる話者指向の副詞 (speaker-oriented adverb) である 'as far as I know' 'interestingly enough' が使われている事実，(24c) では通例主節のみに適用され得る根変形の1つである倒置変形が適用されている事実は，非制限用法の関係詞節が主節とは異なった主張（いずれの場合も話し手の注釈）を表している証拠と言えよう。だからこそ，1.3. で指適したように，非制限用法の関係詞節は1つの独立した tone unit を形成できるのである。

1.5. 不定冠詞と関係詞節

本節では，不定表現が関係詞節を従えるとき，i）非特定的表現と主語の属性を表す表現は義務的に制限用法を従え，ii）特定的表現は制限用法を従えても，iii）非制限用法を従えてもよいことと，さらに，問題の不定冠詞は，定冠詞の場合と同様に，iii）を除き先行詞＋関係詞節全体につくことを述べることにする。

i）から始めよう。一般に，否定文および疑問文における不定名詞句は非特定的と解釈される傾向が強いが，その傾向は問題の名詞句の内容が貧弱であればあるほど強くなる[19]。従って，次の文における不定名詞句は典型的に非特定的と解釈される。

(25) a) We don't have a cat.
b) Do you have a knife?

このような典型的な非特定的表現は，(26) に見るように，制限用法の関係詞節は許容しても非制限用法のそれは許容しない。

(26) a) We don't have a cat which is clever enough to understand human language.
b) * We don't have a cat, which is clever enough to understand human language.
c) Do you have a knife which cuts well?
d) * Do yon have a knife, which cuts well?

このことは関係詞節の果す機能からも容易に説明できる。非特定的表現が非制限用法の関係詞節を拒否するのは，この関係詞節の機能が先行詞の表す指示物に関して主節の命題内容とは独立した話し手の注釈・意見・補足説明を表すのにあるにもかかわらず，非特定的名詞句の場合のように，自分がその具体的指示物の認知もしていない entity に対して

話し手が注釈・意見・補足説明などできるはずがないからである。同様に，非特定的表現が制限用法の関係詞節を許容するのは，この関係詞節の機能が先行詞の表す指示物の範囲を限定することにあるのだから，事実上何の限定も受けていない非特定的表現は自由に関係詞節を受け入れることができるからである。非特定的表現の方から言えば，むしろ，身元保証をしてくれる関係詞節は大歓迎と言うべきである。

主語の属性を表す不定表現についても，非特定的不定表現について述べたことがそのまま当てはまる。制限用法の関係詞節は許容するが(27a)，非制限用法のそれは拒否する (27b)。また，関係詞節の表す機能についても全く同じ議論が成立することは言うまでもない。

(27) a) John is a scientist who has made a great contribution to the progress of science in this country.

b) * John is a scientist, who has made a great contribution to the progress of science in this country.

以上，非特定的表現と主語の属性を表す表現は義務的に制限用法の関係詞節を従えることを述べたが，この原則に反すると思われる例があるので以下簡単に触れておきたい。まず次の文を見られたい。

(28) Men may still think their ideal woman is a housewife, willing to cook and clean, who is prepared to follow their wishes and requirements. (E. Curry, *Women in Society*)

明らかに a housewife が（補文の）主語の属性を表す不定表現で，一見，これを先行詞にして非制限用法の関係詞節が続いているように見える（who の前に comma があることに注意)。しかし，これは書き手が比較的重い関係詞による 'double restriction'[20] を避け，単に形容詞句を用いたものと考えられる。なぜなら，(28) は (29) と言い換えの関係にあるからである。

(29) Men may still think their ideal woman is a housewife who is willing to cook and clean and who is prepared to follow their wishes and requirements.

確かに (28) のような例は一見して 'apparent counterexample' と見抜ける例ではあるが，Cantral (1972) が指摘している (30) のような例はどのように考えるべきであろうか。

(30) a) Since John is a lexicalist, all of whom are badly con-

fused, I never listen to him.

b) George is a Blackstone Ranger, who are really tough.

(30)で注意すべきは，a), b)の関係詞節がいずれも複数の総称的文を表していることである。このことは，(30a, b)がそれぞれ(31a, b)と言い換えの関係にあることから明らかであると思われる。

(31) a) Since John is one of a class of linguists composed of all and only lexicalists, all of whom are badly confused, I never listen to him.

b) George is one of a class of tough guys composed of all and only Blackstone Rangers, who are really tough.

もし上の分析が正しいとすれば，複数総称を表す関係詞節を従えたことで問題の不定表現が総称的表現に変化したことになろう。とすれば，上の事実は後に触れる[21]ように一般に総称概念を表す表現が義務的に非制限用の関係詞節を従えることと何の矛盾も来さないことになる。

特定的不定表現が制限・非制限の両用法の関係詞節を受け入れるのは(32)に見る通りである。

(32) a) A man who looked like a Chinese came to see you while you were out.

b) A man, who looked like a Chinese, came to see you while you were out.

(32a)の A man who looked like a Chinese が特定的表現であることは，この文に続けて

(33) Here's *his* card.

とこの特定的表現を代名詞で受けられることから明らかである。特定的表現を制限用法の関係詞節で修飾するか非制限用法の関係詞節で修飾するかは，話し手がどれだけの情報をその特定的表現に込めようとしているかによって決まる。たとえば，(32)において話し手が look like a Chinese という情報を文の表す命題に欠くべからざるものと考えるのであれば制限用法の関係詞節にし，それが附随的なものと考えるのであれば非制限用法の関係詞節にする。従って，前者の場合，関係詞節によって表される情報は(34)のような疑問文に対する答えとなり得るが，後者の場合は，それが許されず単に話し手の注釈・補足説明になるだけである。

(34) What man / Which man / Who came to see me while I was out?

特定的表現が非制限用法の関係詞節を従えられるが非特定的表現は不可能であるという事実に関連して興味深いのは，1.2. で触れた，modality を表す文脈では特定的にも非特定的にも解釈され得る（7b）に見られるような不定表現が制限用法の関係詞節を伴った場合は特定・非特定の解釈のあいまい性（ambiguity）をそのまま残すが，非制限用法の関係詞節を従えた場合はそのあいまい性が消え，特定的解釈のみが許されるということである。

(35) a) John says he wants to marry a Japanese girl who has a good education.

b) John says he wants to marry a Japanese girl, who has a good education.

たとえば，(35b) に続けて (36) のように言えるけれども，(35a) でそれが許されるのは問題の不定表現が特定的に解釈されるときに限られる。

(36) A: Do you know her?

B: Yes. She's a nice girl, and he says she's coming to the party tonight.

非制限用法の関係詞節が先行詞の表す指示物に関して少なくとも話し手の認知を要求することを考えれば，上の現象は極めて自然なものと言える。

a Japanese girl who has a good education のような不定名詞句を [a [Japanese girl who has a good education]] と分析すべきかまたは [a Japanese girl [who has a good education]] と分析すべきかについては決定的な証拠はないけれど，次の one の振舞いが前者の分析を支持しているように思われる。

(37) A: Do you have a dictionary?

B: Yes, I have one —— a very good one.

既出の非特定的普通名詞句は one で受けるけれども，形容詞句によって修飾されると不定冠詞が現われることに注意したい。このことは，たとえば，a good dictionary は [a [good [dictionary]]] の構造を持つことを示唆するからである。もしこの分析が正しければ，関係詞節は上の

good と同じ機能を果しているのであるから，関係詞節構造もまた同じ構造を持つはずである。

1.6. 総称表現と関係詞節

Smith (1964) は総称を表す the は制限用法・非制限用法の関係詞節を受け入れるとしている。彼女は非制限用法の例として，(38) をあげているが，制限用法の例はその論文には見当らない。

(38) The potato, which was the principal foodstuff in Peru, was unknown in Mexico.

彼女のようにもし総称名詞を 'a noun if taken as a class noun or as typical class member is generic' (p. 261) と考えるなら，総称表現が制限用法を従え得るとの彼女の主張は自家撞着を来たしていると言わねばならない。なぜなら，総称表現に制限用法の関係詞節が続くということは，その節に述べられる特質ゆえに全体としての class に sub-class が存在しなければならないことになり，同時にそうした特質を持たない member もまた存在しなければならなくなることを示唆するからである。従って，総称表現は意味上非制限用法の関係詞節を要求し，制限用法のそれは拒否するはずである。そして，この予測は (39) に示すように経験的な証拠によって裏づけられる。

(39)[22] a) A / The whale, wich is a mammal, suckles its young.

b) * A / The whale which is a mammal suckles its young.

c) An / The eagle, which is the national bird, is generally only seen by zoo visitors.

d) * An / The eagle which is the national bird is generally only seen by zoo visitors.

ここで注意すべきは総称的陳述と一般的陳述とを混同してはならないということである。たとえば，(40) の各文は典型的な一般的陳述を表す文であって決して総称文ではない。

(40) a) A whale which is sick yields no blubber.[23]

b) A man who smokes a pipe looks distinguished.

上の事実は，一般的陳述は if 節によって言い換えが可能であるが，総称的陳述はそれが許されないことからも確かめられる。

(41) a) If a whale is sick, it yields no blubber.

b) *If a whale is a mammal, it suckles its young.

2. 固有名詞と関係詞節

固有名詞は定義上'unique reference'を持つ表現であるから，定表現の中でも定としての性質を最も多く有している表現であることは既に1.1.で述べた。定表現が本来的に非制限用の関係詞節を要求するなら，最も定的な表現である固有名詞がそれを要求するのは当然のことである(cf, 1a, b)。しかし，この原則に反すると思われる例があるので，以下それらを1）固有名詞の普通名詞化現象，2）継続 (continuative) 関係詞節，3）望遠的 (telescoped) 関係詞節に分けて述べることにする。

2.1. 固有名詞の普通名詞化現象

最も定的な表現である固有名詞も関係詞節による身元保証が必要になる場合がある。i）同じ名前で呼ばれる entity が複数存在しこれを区別する必要が生じた場合と，ii）同一の entity を異なった相から比較・対照する必要に迫られた場合である。

(42) a) Which White are you referring to, the White who is a singer or the White who is a doctor?

b) She was not quite certain that the Edward who wrote to her now was the same Edward that she had known[24].

c) The Shakespeare his mother knew was probably quite different from the Shakespeare his readers knew.

(42a) がi), (42b, c) がii）に対応することは言うまでもない。(42a) に対しては，この文の前に (43) を想定することが可能である。

(43) We have two Whites.

換言すれば，i), ii）のいずれの場合も固有名詞がその本性である'uniqueness'を失い，限りなく普通名詞に近づくということなのである。とすれば，上の場合，固有名詞が普通名詞同様，制限用法の関係詞節によって修飾されるのは極めて自然なことと言わねばならない。

このように考えてくると，Smith (1964) が指摘した事実，すなわち，

(44) * Tom who is from the South hates cold weather. (= (1b))

を非文にしているのは，(44) の文脈からは Tom という人物の異なった側面を比較・対照すべき場面を想像することが極めて難しいという事実であることが判明する。「～生れである」は時の経過や事情によって変わるものではない。同名異人の場合ならいざ知らず，同一人物で南部生れであると同時に北部（東部／西部）生れということはそれ自体矛盾した存在となろう。それゆえに (44) は非文なのである。従って，もし聞き手が (44) を無理に解釈しようとすれば，同名異人の場合，すなわち，上記 i ）の場合を想定しなければならなくなる。それを表したのが (45a) であり，さらに (45b) のように続けられよう。

(45) a) The Tom who is from the South hates cold weather,
b) but the Tom who is from the North hates hot weather.

ところが (44) と parallel な関係にあると考えられる (46) にあっては (45a) に対応する文さえ想像するのが難しい。1564年生れの Shakespeare はわれわれにとっては唯一人，*King Lear* などを書いた詩人以外には考えられないからである。この意味で，(46) は (44) よりも容認性が落ちるであろう。

(46) **Shakespeare who was born in 1564 did not know about TV.

この同一人物の異なった側面を比較・対照するという原則で説明できると思われるのが，A. Christie, *Curtain* の次の一節の関係詞節の用法である。

(47) Do you understand the thoughts that came into my mind ... the thoughts that had lain under the surface for some time?

Judith with a bottle in her hand, Judith with her young, passionate voice declaring that useless lives should go to make way for useful ones. Judith whom I loved and whom Poirot also had loved. Those two people that Norton had seen ... had they been Judith and Franklin? But if so ... if so ... No, that couldn't be true. Not Judith.

(47) では Judith のさまざまな思い出が語られている。これにいちいち the をつけたのでは文体上重くなるために省かれたのであろう。

2.2. 継続関係詞節

前節で見た固有名詞の普通名詞化した制限用法は，Smith (1964) の真の反例にはならないであろうが，次の (48) に見られる例はどうであろうか。

(48) a) Innes relayed the news to Wainwright who covered his face with a hand as if in a prayer.

b) Meanwhile she had dialed the office number of Mr. Wainwrighte who answered personally.

c) She glanced at Nolan Wainwright who shrugged and said quietly: .... (以上 A. Hailey, *Money Changers*)

d) "You naughty girl", Marjorie waggled her finger at Jannifer who looked first at her mother, then at her nanny, then back to her mother. (B. Wood, *The Killing Gift*)

e) He showed it to O'Malley who got up at once and hurried to the phone.

f) She placed it (= the large roast of beef) on the table in front of Mike who stood up and carved it .... (以上 R. Dahl, *Someone Like You*)

g) Armstrong and Aldrin have said goodbye to Collins who will wait in orbit for them. (J. Arthur, *The Space Race*)

(48) に見られる制限用法が前節で論じた固有名詞の普通名詞化の結果生じたものでないことは明らかである。統語的には the を伴わず[25]，意味的にはいずれの文でも上記 (i)，(ii) が当てはまる文脈ではないからである。Smith (1964) によれば，当然非制限用法になるはずの例である。事実，筆者の4人の informants のうち1人は (48) の各文における comma の有無はその文法性に影響を与えないとの反応を示したが，あとの3人は非制限用法にしたいとの意見であった。さらに，(49) のような例まで加えるなら，現代英語[26]から集めた同様の例が現在筆者の手もとに93例ある。

(49) a) I owe a special gratitude to Rena Somerville who, as my secretary in the last few years, has typed so many

versions of certain sections of my manuscript that she could probably reproduce at least the gist of them from memory! (J. Lyons, *Semantics* 1)

b) I am especially grateful to Paul Neubauer who worked with me through every inch of the dissertation. (E. M. Riddle, *Sequence of Tenses in English*)

c) The author wishes to express his gratitude to Noam Chomsky and Paul Postal who, giving freely of their time, influenced virtually every aspect of this took. (P. S. Rosenbaum, *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*)

d) She was talking to Mr. Symmington who, huddled in a chair, was looking completely dazed. (A. Christie, *The Moving Finger*)

e) Heads turned to Jerome Patterton who had the decisive vote. (A. Hailey, *Money Changers*)

ではなぜこのような現象が生じるのか。この問いに直接答える前に，関係詞節の非制限用法における2用法について簡単に触れておきたい。

関係詞節の非制限用法を論ずるに当って，これまで考察の対象にしてきた用法はすべて伝統的に同格用法 (Appositive use)[27] と呼ばれる用法であった。この用法は統語的には文中の位置を占め，典型的に主節の主語を修飾するものであるが，意味的にはこれまでも何度か指摘するところがあったように，主節との論理的係わりは弱く主に話し手の先行詞の表す指示物に対する注釈・補足説明を表すものであった。従って，この場合，文の表す主な主張は主節によって表されるのが常態であった。これに対し，統語的には通例文末の位置を占め意味的には主節と時間的に緊密な関係を持ち，関係詞節によって表される内容は主節によって表される内容の後に続くことを示す継続用法がある。次にあげる Jespersen (1927), Part III から引用した例が典型的な継続用法の例である。

(50) a) The mother put me towards the child, who presently seized me by the middle.

b) He had seen my aunt give this person money outside the garden rails in the moonlight, who then slunk

away and was seen no more.

c) In the wild weather Tio Ramón summoned Paco, who summoned Enrique, who sent Lotta to find Miguel, who shook his head.

(50a, b) の関係詞節に時の経過を表す副詞 presently, then が用いられていることに注意したい。このことは，関係詞節の内容は主節の内容の後に起こることを統語的にも明白に表していることを示すものである。従って，たとえば (50a) は文体上の相違は現われる[28]ものの，関係詞節を (51) のように言い換えても意味上何ら変化は見られない。さらに文の表す主張にしても，同格用法の関係詞節の場合とは異なり，主節の表す主張と関係詞節の表す主張とから成りその強さは同等であると考えられる[29]。

(51) The mother put me towards the child, and presently he / she / it seized me by the middle.

ここで本題に立ち帰って，(48) (49) のような現象がなぜ生ずるのかを考えてみよう。上の継続用法の非制限節を考慮に入れてとくに (48) の各例を眺め直してみると，comma は無いものの統語的にも意味的にも (48) の各文は典型的な継続用法と寸分違わないことがわかる。もしこの観察が正しいとすれば，関係詞節の表す内容が主節の表す内容の後に起こることが明白であるがゆえに，たとえ comma がなくとも意味的なあいまい性を引き起こす危険がない。そして，comma の機能が何よりも意味のあいまい性を除去することにあるとすれば，(48) のような出来事の時間的前後を明白に示す文脈にあっては，comma の有無がその文法性に影響を与えるほど強くないものと考えられる。

上の考察を支持すると思われる証拠が少なくとも1つある。先行詞に固有名詞がきた場合と全く同じように普通名詞の場合も同様な現象が見られるからである。

(52) a) She told him, and he turned and whispered something to the other detective who immediately went outside into the street. (R. Dahl, *Someone Like You*)

b) Juror Five lights a pipe which he smokes constantly. (R. Rose, *Twelve Angry Men*)

c) I beat an unobtrusive retreat into the dining room

where Megan was wolfing down kidneys and bacon.
(Christie, *The Moving Finguer*)

(52c) が関係副詞による関係詞節であるという事実を除けば (52) の各文は (50) と統語的にも機能的にも parallel な構造を持っていることは明らかである。たとえば (52a) の関係詞節に immediately が用いられていることからも明らかなように，主節で表されている行為の後に関係詞節で表されている行為が続き，従って，関係詞節は，

(53) ... and he / she immediately went outside into the street.

と言い換えることも可能なのである。しかも，先行詞に the other detective という定表現が用いられていることを考慮に入れるなら，(50a, b) と同様に非制限用法になっても何ら不思議でない，というより非制限用法になるべきであるにもかかわらず，一見制限用法になっているのは，意味解釈上混乱を惹起する文脈ではないからであると考えられる。とすれば，(48) に見られるような例は話し手が言葉の経済学に従った所産となろう。

次に (49) のような現象がなぜ起こるのかについては，現在のところ筆者に納得のいく説明はできないが，固有名詞の制限用法は2.1.で述べた普通名詞化現象を除き同格用法にはまず見られない[30]ことと，(49)の関係詞節が文末の位置を占めていることと関連しているのではないかと思う。同格用法の関係詞節はそれが埋め込まれた文の topic になる主語の位置を占める——この位置はまた old information を表す位置でもあるからこそ，話し手の注釈を受けやすくなる——のに対し，(49) (や(48)) の関係詞節が占める文末の位置は最も文の焦点 (focus) になりやすく，従って new information を表す位置である。とすれば，これらの関係詞節は先行詞の身元保証を行う機能を果しているというより，文の主張を表している，と言ってよいことになる。この事実は，Ziv & Cole (1974) の，外置された関係詞節は先行詞の身元保証を行う機能より文の主張を表す，との観察と一致する。彼らは (54a) の疑問の及ぶ範囲は主節にあるのに対し，関係詞節の外置された (54b) のそれは関係詞節にあるという。このことは，(54a, b) のそれぞれに対応する疑問文に対する答えによって確かめられるという[31]。

(54) a) A man who had three ears came into the room.
b) A man came into the room who had three ears.

(55) a) Did a man who had three ears come into the room?
b) No, no one who had three ears came into the room.
(56) a) Did a man come into the room who had three ears?
b) No, no one who came into the room had three ears.

換言すれば，(54a) の文の主張は主節に，(54b) では関係詞節にあると言える。ここでわれわれにとって重要なのは，(54b) の関係詞節が文の主要な主張を表し得るようになったのは外置変形によって文末の位置に移されたためであるという事実である。このことに注目すれば，(49)の関係詞節は表面的には制限用法の形態を取っているけれども，文の表す主張という観点から言えば非制限用法と実質的には変わりないことになり，従って，comma の有無は文法性に影響を及ぼすほど強くないと言えるのではないかと思う。

2.3. 望遠的関係詞節

前節で取り上げた Smith (1964) に対する反例はいずれも関係詞節が文末の位置を占めるものであった。しかし，次の検事と証人の応接に見られる例はどのように考えるべきであろうか。

(57) A: 'And you had some conversation with this individual?'
B: 'Yes. I asked him if he would follow a car for me, and I pointed out Miss Duvall who was at the telephone and told him that was the girl I wanted shadowed. I showed him my credentials as a private detective.'
(E. S. Gardner, *The Case of the Sunbarther's Diary*)

問題の関係詞節はそれが含まれる文の文末の位置を占めてはいるものの，文の途中に位置していることは否定できない事実である。こうした例の説明を与えてくれると思われるのが，Taglicht (1972) の望遠的関係詞構造 (Telescoped Relative Construction) である。彼は，たとえば，(58a) は (58b) と同義で，(58a) の関係詞節は先行詞の位置を占める (the) Cooper ではなく，この固有名詞を member とする class を表す man を修飾しているだけであると言う。

(58) a) But in March he must face the Cooper who shattered Jose Ortez.
b) But in March he must face the man who shattered

Jose Ortez, (namely) Cooper.

この現象は何も固有名詞に限られるだけではなく，普通名詞にも見られ，次の (59a) は (59b) と同義である。

(59) a) He knows the wealthy and fashionable world that is his background.

b) He knows the world that is his background——the wealthy and fashionable world.

Taglicht のような，関係詞節によって限定される名詞句が文の表面に明示的に表れていない望遠的関係詞節に沿って，(57) の関係詞節を眺めれば，それによって修飾されているのは girl であって Miss Duvall でないことになる。つまり，

(60) ... I pointed out the girl who was at the telephone, (namely) Miss Duvall, ...

となる。確かにこの解決法は有力な説で，彼の説を支持すると思われる証拠もないことはない。たとえば，次の文

(61) The temples are all associated in some way with the life of the Buddhist priest Kobo Daishi (Kukai) who was born on Shikoku in 774 and is the founder of the Shingon sect of Buddhism. (K. Morikawa, *Japan from North to South*)

にあっては，真の先行詞である class を表す the Buddhist priest が明示的に示されているが，それが表面から姿を消せば，(58) と同例となろう。多分，次の (62) の例も上の分析を援用して説明できるであろう。

(62)[32] a) This model is Lisa Tréhot who frequently posed for Renoir.

b) Narcissus pined with love of his own image. His corpse became the flower of that name. Three nymphs look on; one of them is Echo who loved Narcissus.

つまり，(62) の各文の真の先行詞はそれぞれ (the) model, (the) nymph と考えるのである。

本章を終えるに当り，意味的には固有名詞と全く同一の機能を果す father, mother, husband, wife などの家族を表す語についても上述の議論がそのまま当てはまることを指摘しておきたい。すなわち，これら

の名詞句が同格用法の関係詞節を従えるときは義務的に非制限用法になるが，継続用法の場合は，comma の有無がその文の文法性に決定的な影響を与えるほど強い要因にはならない。

(63) a) * My husband who is staying in London says he will meet you at the airport.

b) They were exceptionally nice to her, and Jack Noonan asked if she wouldn't rather go somewhere else, to her sister's house perhaps, or to his own wife who would take care of her and put her up for the night. (R. Dahl, *Someone Like You*)

c) I'm also very grateful to my family who were especially helpful to me in the final days of writing the first draft. (E. M. Riddle, *Sequences of Tenses in English*)

3. おわりに

本稿では，Smith (1964) は限定詞を 'unspecified', 'specified', 'unique' の3種類に下位分類しているが，制限・非制限用法の両用法と共起するとした 'specified' に関しては少なくとも次のように修正するべきであることを述べた。(i) 先行詞が定冠詞を伴い単独で定表現を形成しているときは義務的に非制限用法の関係詞節を伴う。(ii) 定冠詞を伴う先行詞が制限用法の関係詞節を従えるときは，$[_{\bar{N}}\ [_{DET}\ \text{the}]\ [_{\bar{N}}\ N\ \bar{S}]]$ の構造を持つ。(iii) 先行詞が不定冠詞を伴い単独で特定的不定表現を形成するときは非制限用法の関係詞節を伴い得る。制限用法の関係詞節を従えるときは定冠詞の場合と同様な構造を持つ。(iv) 先行詞が非特定的不定表現を成すときは義務的に制限用法を伴う。(v) 冠詞を伴う先行詞が総称表現を表すときは義務的に非制限用法を従える。さらに先行詞に固有名詞またはそれに準ずる名詞がきた場合は次のような修正が必要であることを論じた。(vi) 普通名詞化された場合は義務的に制限用法の関係詞節を伴う。(vii) 同格用法の場合は義務的に非制限用法の関係詞節を従える。(viii) 継続用法の場合，通例非制限用法の関係詞節を伴うが，comma の有無はその文の文法性に決定的影響を与えるほどの強い要因ではない。

今回は限定詞と関係詞節との関連をもっぱら関係代名詞節にしぼって論じたが，ここで展開した議論はその大筋において関係副詞節にも当てはまるものと思われる[33]。しかし，関係副詞節と関係代名詞節とでは関係詞の省略など重要な点で異なった振舞いを示すので，上の検証は機を改めて行いたいと思う。 (60. 7)

【注】

* 本稿を執筆するに当り，informantsの役を勤めて下さった Mr.Ormandy, Mr. Moores, Mrs. Kawasumi（以上米人）および Mr. Townhill（英人）の4氏に謝意を表したい。

1) 本稿の目的が限定詞と関係詞節用法の相関関係を論ずることにあるので，次のような通例前文全体を先行詞にしたり，また前文の名詞句以外の要素を先行詞にする非制限法の関係詞節は考察の対象としない。

（i） Bill passed the exam, which was quite surprising.

（ii） She looked Puert Ricon, which she was.

2) この例文は Lyons (1980) からの引用。彼はこの文について次のように説明している。"Example (14) (本稿の (2d)) may be successful even though the hearer has never heard of the Little Mermaid, provided he is prepared to assume that it is probably a well known landmark in Copenhagen". (pp. 86-7)

3) もちろん，'The book will be interesting ....' のように未来時制ではなく 'The book is ....' としたなら許容されないのは当然である。

4) Leech & Svartvik (1975), p. 55.

5) any や some が時として不定代名詞，不定形容詞と呼ばれることに注意。

6) もう少し正確に言えば特定的な読みには2通りの解釈が可能である。1つは上述のように文の主語の John が特定の日本人女性を念頭に置いている場合と，話し手がある日本人女性の存在を念頭に置く場合である。cf. Jackendoff (1972), Baker (1973).

7) cf. 安井 (1980)。彼は Halliday (1967a) にならって，この be を内包性の be (intensive *be*) と呼んでいる。

8) Burton-Roberts (1976), pp. 428-29.

9) (15) は Leech & Svartvik (1975), p. 62 からの引用文。

10) Ziv & Cole (1974), pp. 777-78. (16) の文は彼らからの引用。

11) 非制限用法の関係詞節を含む文は，従って，主節の主張と関係詞節の主張

の2つの主張を持つことになる。このため，変形文法における非制限用法の派生は，たとえば，(15b) で言えば，概略 Children learn easily and children should start school as early as possible. のような深層構造から Relativization Transformation の適用を受けて得られるものと考えられている。しかし，このような分析は，主節の主張と関係詞節の主張が同じ強さを持つということを示唆する意味で不適切である。なぜならば，Loetscher (1973) も指適しているように (p. 363)，(i) の問いに (ii) と答えるなら2つの文が同等の資格で (i) の答えを形成することになるが，(iii) と答えるなら，主節のみが適切な答えを形成するからである。

(i) What are the particular characteristics of a lark?

(ii) The lark has a very sweet song. It builds its nest on the ground.

(iii) The lark, which builds its nest on the ground, has a very sweet song.

12) この事実は，たとえば (15b) で言えば，(15b) は必ずChildren should start school as early as possible. を含意する (entail) ことからも確認できる。

13) (17) の各文は Leech & Svartvik (1975), pp. 285-6 からの引用である。

14) 一般には定冠詞を伴った制限用法の構造は (18a) のような構造を持つとされている。たとえば，つい最近出た Quirk et al. (1985) は [the book [which you ordered last month]] (p. 365) のように分析しているし，Celce-Mercia & Larsen-Freeman (1983) も同様である。cf. pp. 360-73.

15) Schachter (1972), p. 25. なお，(20) は同掲の論文 p. 17 の (36) 文を参考に作った文である。

16) A writer that I like is Thomas Hardy. は One of the writers that I like is Thomas Hardy. の意になることに注意。

17) *that* stately bearing which we know so well や *that* courage which you boast of などの that は deictic ではなく，しばしば軽蔑・賞賛などの感情的色彩を帯びた用法で，「(よく知られている) あの」の意である。だからこそ制限力が強くなるのである。cf. I hate *that* Johnson.

18) Hooper & Thompson (1973), p. 489 からの引用。

19) Kroch (1975) によれば，not + X + indefinite NP という構文における不定名詞句は，通例は非特定的と解釈されるが，それが豊かな記述内容 (descriptive content) を持つと特定的と解釈されるという。たとえば，(i) John didn't obey a traffic light. は非特定的であるが，(ii) John didn't

obey a red light about to change to green. では特定的になるという。

20) Jespersen (1927), Part III, pp. 87—8.

21) 1.6.節を参照。

22) (39) の文は Burton-Roberts (1976), pp. 436-7 からの引用。

23) (40a) は上掲の論文 p. 440 からの引用。

24) (42b) は Jespersen (1927), Part, III, p. 96 からの引用。

25) the を伴うのは原則であるが，必ずしも義務的ではないらしい。とくに，(42a) の文脈で，informant の1人がこの冠詞の有無に全く気がつかず，筆者が指摘してはじめて冠詞を伴うほうがよいとの判断を示した。同じことが，固有名詞が形容詞を attributive use として伴う次のような表現にも観察できる。両例とも A. Christie, *The Moving Finger*, Pan Books, p. 81 に見られるのが面白い。

(i) And glaring at us for some moments in order to drive that point thoroughly home, *the indomitable Florence* left the room, ...

(ii) 'We don't seem to be going down very well', I said, 'Megan gets tired of us, Partridge disapproves of you, *faithful Florence* disapproves of both of us.

26) 筆者の資料は1940年以降に出版された小説，評論，論文，言語学の専門書から成る。

27) この名称は Ziv & Cole (1974) に従ったが，Leech & Svartvik (1975) も同じ用語を用いている。しかし，この用法を狭い意味で用い，たとえば，(i) のような場合だけを指す人もいる (Celce-Mercia & Larsen-Freeman (1983), p 381)。

(i) Mr. Langstrom, our new neighbor, comes from Providence.

28) 継続用法の非制限関係詞は 'decidely literary, not colloquial' (Jespersen (1927), Part III, p. 195) である。

29) 文の主張の所在を確かめる一方法は付加疑問が作れるかどうかである。なぜならば付加疑問は主張を表す文から作られるからである。そこで，継続用法の関係詞節を含む文に付加疑問を作ってみると，付加疑問は主節ではなく関係詞節から作られる可能性がある。

(i) Mary went posthaste to Poirot, who negatived the suggestion very vigorously, {(?) didn't he / * didn't she}?

(i) のような文から付加疑問が作りにくいのは (ii) のような conjoined S

から作りにくいのと同じである。

(ii) Mary went shopping and Tom went swimming,

$$\left\{\begin{array}{ll}(?) & \text{didn't he} \\ * & \text{didn't she} \\ & \text{didn't they}\end{array}\right\} ?$$

(i) の事実は継続用法の関係詞節は少なくとも主節と同じ程度の主張を表していることを示すものである。

cf. (iii) The man who fixd the radio left this note, didn't he?

30) 筆者の手もとにある，固有名詞が制限用法を従えている例が合計93例あるが，そのうち，同格用法の例がわずかに次の2例であった。しかし，(i) の著者は固有名詞を先行詞とする関係詞が生ずる環境ではすべて制限用法を用いていた。(ii) は校正上の誤りである可能性もある。

(i) Noam Chomsky who gave most generously of his time and expertise provided invaluable insights and challenges. (E. Schanber, *The Syntax and Semantics of Questions in Navajo*)

(ii) Hartsel who had produced a key, promptly stepped back and waited for Arlene to fit the key in the lock. (E. S. Gardner, *The Case of the Sunbather's Diary*)

31) Ziv & Cole (1974), p. 775.

32) London の the National Gallery に展示してある Renoir と Claude Gellea の絵に付せられた解説からの引用。

33) 関係代名詞節と同様に，関係副詞節にも次のような現象が見られる。

(i) * Kanazawa where I lived until 7 was the castle town of the Maeda Clan in the Edo period.

(ii) She died in New York in 1957 and was buried in California where she had her last home. (Carol & Diana Christian, *Famous Women of the 20th Century*)

【参考文献】

Andrews, A. D., Ⅲ. 1975. "Studies in Syntax of Relative and Comparative Clauses". Ph. D. Dissertation, MIT.

Auwera, J. der V. (ed.) 1980. *The Semantics of Determiners*, Croom Helm, London.

Baker, C. L. 1973. "Definiteness and Indefiniteness in English", Reproduced by Indiana University Linguistics Club, 1-23.

Burton-Roberts, N. 1976. "On the Generic Indefinite Article", *Language* 52, 427-58.

Cantral, W. R. 1972. "Relative Identity", *CLS* 8, 22-31.

Celce-Mercia, M. and D. Larsen-Freeman. 1983. *The Grammar Book—An ESL / EFL Teacher's Course*——Newbury House.

Chiba, S. 1972. "Another Case for 'Relative Clause Formation Is a Copying Rule'", *SEL* 1, 1-12.

Chomsky, N. 1973. "Conditions on Transformations", in Anderson, S. R. and P. Kiparsky (eds.) 1977. *A Festschrift for Morris Halle*. Holt, Reinhart & Winston, 232-86.

Close, R. A. 1962. *English as a Foreign Language* (3rd Edition). George Allen & Unwin.

Declerck, Renaat. 1978. "A Note on Evaluative Nouns and Relativization", *Journal of Linguistics* 14, 59-76.

Fairclough, N, 1973. "Relative Clauses and Performative Verbs", *Linguistic Inquiry* IV, 526-31.

原田かづ子. 1971.「冠詞と関係詞節の相互関係」『英語学』6号, 66-99.

Hawkins, J. A. 1978. *Definiteness and Indefiniteness—A Study in Reference and Grammaticality Prediction*, Croom Helm, London.

Hooper, J. 1975. "On Assertive Predicates" in Kimball, J. P. (ed.) 1975. *Syntax and Semanties* 4. Academic Press, 91-124.

——and S. A. Thompson. 1973. "On the Applicability of Root Transformation", *Linguistic Inquiry* 4, 465-97.

Hornstein, N. & D. Lighthoot. 1981. *Explanation in Linguistics*. Longman.

板垣完一. 1972.「不定名詞句と相互指示代名詞との関係に関する一考察」『英語学』8号, 31-39.

Jackendoff. R. S. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT.

Jespersen, O. 1927. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part III. George Allen & Unwin.

梶田　優. 1968.「変換文法における関係詞節の問題」『変形文法理論の軌跡』大修館, 1976, 217-36.

Kroch, A. S. 1975. "The Semantics of Scope in English", Reproduced by Indiana University Linguistics Club.

Leech, G. and J. Svartvik. 1975. *A Communicative Grammar of English*.

Longman.

Loetscher, A. 1973. "On the Role of Non-restrictive Relative Clauses in Discourse", *CLS* 9, 356-68.

Lyons, C. G. (1980) "The Meaning of the English Definite Article" in Auwera (1980), 81—95.

丸田忠雄. 1975.「関係詞についての一考察」『英語学』13号, 96-93.

水口志乃扶. 1981.「非制限関係詞節の機能」『英語学』23号, 40-67.

中右　実. 1980.「文副詞の比較」『日英語比較講座2　文法』大修館, 157-220,

大塚高信・中島文雄（監修）. 1982.『新英語学辞典』研究社.

Poutsma, H. 1929. *A Grammar of Late Modern English*, Part I (Second Half) P. Noordhoff-Groningen.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English.* Longman.

————1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman.

Ross, J. R. 1967. "Constraints on Variables in Syntax". Ph. D. Dissertation, MIT.

Schachter, P. 1972. "Focus and Relativization". Reproduced by Indiana University Linguistics Club. 1-43. (Reappeared in *Language* 49, 19-46.)

関　茂樹. 1981.「非制限的関係詞節の機能的特性」『英語学』24号, 44-55.

Smith, C. 1964. "Determiners and Relative Clauses", in Reibel, D. V. and &. A. Schane (eds). 1969. *Modern Studies in English——Readings in Tranformational Grammar——*. Prentice-Hall. 247-63.

Taglicht, I. "A New Look at English Relative Constructions". *Lingua* 29, 1-22.

武田修一. 1977.「限量化と不定冠詞について——特に総称不定冠詞の機能をめぐって——」『英語学』17号, 32-45.

Thompson, S. A. 1971. "Deep Structure of Relative Clauses", in Fillmore, C. J. and D. T. Langendoen (eds.). *Studies in Linguistic Semantics.* Holt, Reinhart & Winston. 78-94.

Thorne, J. P. 1972. "On Nonrestrictive Relative Clauses", *Linguistic Inquiry* III. 552-56.

安井　泉. 1981.「英語の be 動詞の多義性」『英語学』23号, 68-83.

吉田正治. 1985.「固有名詞と関係詞節」『英語青年』181巻, 8.

Ziv, Yael and P. Cole. 1974. "Relative Extraposition and the Scope of Definite Descriptions in Hebrew and English", *CLS* 10, 772-86.